

「殺生石」を歩く

京都の自宅を出発してから、東海道新幹線、東北新幹線を乗り継いで JR 那須塩原駅まで四時間強で能「殺生石」の舞台、栃木県那須野ヶ原に到着しました。玉藻の前が京都から那須野ヶ原までの距離を、「ただひと飛びに」飛んだことを思えば、半日かけてようやくたどりついた旅程です。今回は「殺生石」の史跡が那須高原広域に点在することから那須塩原駅前でレンタカーを借りました。

能「殺生石」のシテ、玉藻の前は容顔美麗にして和漢や詩歌の才にたけていたことから鳥羽院の寵愛を受けていましたが、陰陽師・安倍泰成によって帝の命を奪って日本を乗っとうと企んだ妖狐の正体を暴かれます。京都から遠く離れた那須野の原に隠れ住みながらもなお、那須の領民に危害を与え、朝廷から三浦介義純、上総介広常の両名が成敗に遣わされます。JR 那須塩原駅の東側、栃木県大田原市蜂巣にある篠原玉藻稻荷神社は玉藻の前を祀る神社です。元禄二年（一六八九）には、近くにある犬追物跡、狐塚之址とともに松尾芭蕉が『奥の細道』で訪れたとされています。那須野の一面の畑が広がるなかで、小一時間も車をぐるぐる走らせて、やっと県道に立つ「那須篠原玉藻稻荷神社」の石碑を見つけました。県道からしばらく入る作業道にそって神社があります。その日が雨だったせいか、参道の周囲は、砂利道を一步はずれると靴の中まで水が入りそうなくらいの湿地帯です。神社手前には「鏡が池」がありました。三浦介らがこの池のあたりで妖狐を見失ったところ、妖狐は蟬に身を変えて池から伸びる桜の枝にとまっていました。その正体が水面に映り三浦介に討たれたとの由来が書かれてありました。討たれた妖狐の執心が大石となったのが JR 那須塩原駅をはさんで西側に位置する那須温泉郷にある殺生石です。

史跡にある環境省の立て札によると、那須湯本は舒明天皇の御代（六三〇）に発見され、その時代から貴族が湯治に出かけていた記録がある古い温泉だそうです。現在でも硫黄臭が漂い、「風のない日はガスが発生しますのでご注意ください」の立て札もありました。玉藻の前の妖狐は、まだ健在なのかもしれません。殺生石の史跡は、高校生の時に移動芸術祭で東北地方の舞台を勤めた際に、父と共に訪れました。能「殺生石」は父陸二が得意とし、私も好きな曲のひとつです。今回は玉藻稻荷神社や鏡が池など、殺生石以外の譚蹟を多く見、那須野の原の広さを改めて感じたことで、この曲の持つスケールの大きさと、天竺、唐、日本を舞台にし、さらに京都から那須へと展開する物語の面白さを実感することができました。

平成二十二年弥生吉日

廣田幸稔



→ 篠原玉藻稻荷神社
の石碑を入った
社がある



← 鏡が池 池底から湧き水が湧く

↓ 30cm ほどの小さな狐塚之址の碑



↑ 観光の名所 今も硫黄臭が絶えない

→ 賽の河原 殺生石に続く遊歩道

